

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520496

研究課題名(和文) 認知言語学・用法基盤モデルから探る第一言語と第二言語における文法習得過程

研究課題名(英文) The grammar acquisition processes in first and second languages from the perspective of Usage-Based Theory of Cognitive Linguistics

研究代表者

橋本 ゆかり (Hashimoto, Yukari)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：40508058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：橋本(2008、2011)において提示した言語構造構築メカニズムの仮説の妥当性を検討するとともに、第一言語習得(以下、L1)の幼児、第二言語習得(以下、L2)の幼児、L2成人の3者間の共通性と差異を明確にするために、次のように研究を進めた。1)L2幼児の全部否定形式の習得過程を発表し論文化した。2)L2幼児の接続詞の習得過程を論文化した。3)L2成人の可能形式の習得過程を論文化した。4)L1幼児・L2幼児・L2成人の異同について論文において指摘した。5)L2幼児の研究をレビューし、L1幼児と比較を行い、論文化した。6)並行してデータ収集を進めた。7)成果を講演において公表した。

研究成果の概要(英文)：I conducted the following studies to examine the validity of the language construction mechanism that I presented in Hashimoto (2011) and to clarify the commonalities and differences among the toddler acquiring Japanese as a first language (L1 toddler), the toddler acquiring Japanese as a second language (L2 toddler) and the adult acquiring Japanese as a second language (L2 adult). 1)I published the paper regarding the L2 toddler's acquisition process of negative expressions using interrogative words. 2)I published the paper regarding the L2 toddler's acquisition process of conjunctions. 3)I published the paper regarding the L2 adult's acquisition process of the potential expressions. 4)I indicated the commonalities and differences among the subjects L1toddler, L2toddler and L2 adult. 5)I published the review concerning the L2 toddler's studies and the differences between the L1 toddler and L2 toddler. 6)I collected the data. 7)I published the results in lecture presentations.

研究分野：認知言語学

キーワード：認知言語学 第二言語習得 幼児 文法習得 固まり 日本語 用法基盤モデル スキーマ

1. 研究開始当初の背景

(1)海外の第一言語(以下、L1)および第二言語(以下、L2)習得研究において、学習者が固まりのまま丸暗記した表現(以下、固まり)がルール獲得に繋がるのかというテーマは1960年代以降、著しい変遷を経て今日も尚白熱した議論が続いている。日本語の習得研究においては、固まりのままの産出が報告されているものの、どのように文法ルール獲得へと結びついていくのかについては未だに明らかにされておらず、そのメカニズム解明において実証的な様相の究明が待たれている。

(2)近年、英語のL1習得研究において提唱された言語習得理論である認知言語学の用法基盤モデルが注目されている。その基盤となる考えは、インプットを外部から固まりで取り込み、それらをデータとして蓄積し、抽象化のプロセスを経てスキーマを獲得するというものである。スキーマとは、知識を過去の経験に基づいて抽象化し、構造化することによって鋳型・規範の状態に組み替えられた知識のあり方を言う。Tomasello(2003)においては、1語をピボット(軸)にしたピボット・スキーマの生成の段階をルール獲得プロセスの1段階に位置づけている。橋本(2008、2011)においては、この概念を援用し、固まりから「スロット付きスキーマ」が生成され、それらが合成することで言語構造が構築していくという「スロット付きスキーマ合成仮説」(橋本2008)を提示している。この仮説についてさらに検証を重ねることで、言語習得のメカニズムを解明したいと考える。

(3)固まり習得に関連する先行研究から明らかになった問題点は、次の3点で、固まり習得とルール獲得との関係、何を中心にまたどのように知識の組織化が進んでいくのか、L1とL2習得に違いはあるのか、である。この観点から習得プロセスを精査することにした。さらに類型論的に異なる言語の習得は異なるのかといった観点も加えて行った。

(4)メカニズムの解明といった最終目的のために、次のアプローチを採る。

L2習得研究は、主にL2学習者に対する教育法を追究したいという理由により1960年代後半から発展したもので、成人対象の研究が多かった。L2習得にL1の知見を援用する際、L1習得とL2習得の違いの他にも、年齢や認知能力の差といったさまざまな要因が存在している。そこで、年齢及び認知的発達レベルにおいてL1に近いL2幼児も含めL1幼児・L2幼児・L2成人において調査を行い、その結果を比較検討することで、習得のメカニズム解明に近づけるのではないかと考えた。L2習得であるが年齢差がある場合はどうか、年齢は近いがL1習得とL2習得の違いが

ある場合はどうかといった具合に、ある程度要因を絞り習得プロセスの共通性と差異を検討することで、トライアングレーション式に習得メカニズムの解明に迫ることができると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知言語学的観点より、日本語のL1とL2習得のプロセスとメカニズムの両方を明らかにすることである。

まずは、これまで研究の進んでいないL2幼児に焦点を当て習得プロセスの全貌を明らかにする。さらにL1幼児、L2成人の習得プロセスをも明らかにし、L1幼児・L2幼児・L2成人といった具合に3者間で比較し、共通する普遍的部分と可変的部分を見極める。領域固有の習得プロセスを明らかにしつつ、普遍的な言語構造構築メカニズムの解明を目指す。橋本(2008、2011)において仮説を提示しているため、当該仮説の妥当性を検証することになる。さらに明らかになった知見は教育現場へ還元することを目的とする。

本研究は、言語構造構築メカニズムである「スロット付きスキーマ合成仮説」(以下、CSS仮説)(橋本2008、2011)のL1、L2習得における妥当性を検討し、領域固有のプロセスを明らかにする。さらにL2幼児の言語獲得に必要な環境を明らかにするために、4つの課題を設定し3段階を踏みながら進める。

課題1)L2幼児の他の文法カテゴリーにおける習得プロセスを明らかにしCSS仮説の妥当性を検討する。類型論的に異なる言語を母語とするL2幼児の習得プロセスも明らかにし差異を見出す。(段階I)

課題2)L1習得において文法カテゴリーごとの習得プロセスを明らかにし、CSS仮説の妥当性を検討する(段階II)。

課題3)L2成人において文法カテゴリーごとの習得プロセスを明らかにし、CSS仮説の妥当性を検討する(段階III)。

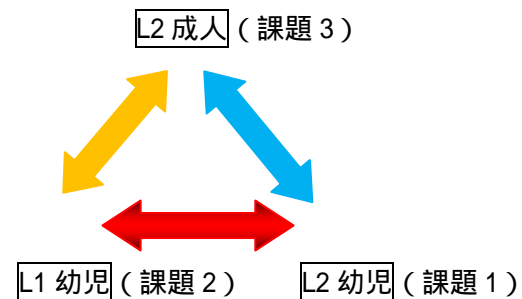


図1 トライアングレーション式アプローチと課題との対応

課題4) L2 幼児の言語獲得に必要な環境を明らかにする(段階1)。

3. 研究の方法

研究は、フィールドにおける観察に加え、数量的及び記述的分析といった複合的手法により行う。

データは以下のものを使用する。

- (1) 幼稚園におけるフィールドワーク(約5年)により収集したL2 幼児の発話データと、新たに収集するデータを使用する。
- (2) 保育園および対象児の自宅を訪問することで収集したL1 幼児のデータを使用する。
- (3) 1年ほど収集したL2 成人のデータを使用する。
- (4) 公開されているコーパスデータを使用する。

4. 研究成果

L2 幼児の習得の実態を捉えることを中心に行い、その結果についてL2 成人、L1 幼児についてはどのようになっているのかといった比較の観点から追究した。

(1) 課題1について

L2 幼児の1年4か月に及ぶデータを分析し、疑問詞を使用した全部否定形式の習得プロセスを発表し論文化した。

L2 幼児の疑問語使用の否定表現の習得プロセスを明らかにし、次に示すような発達段階を明らかにした。この結果は、CSS 仮説(橋本2008)の妥当性を示すものであった。

第一段階) 疑問語だけで全部否定の意味を表出する。固まりの全部否定文を産出する。

第二段階) 固まりの「何もない」「誰もない」等をピボットとした{何もない+ }{誰もない+ }スキーマ等を生成する。スロットに動詞形等を入れる。

第三段階) 疑問語と否定語/辞を分離させる。疑問語をピボットにした{疑問語+ +ない}スキーマを生成する。否定の意味を述部へ移行させ、全部否定の規範文を産出する。

疑問語と述部の双方で修正を行い、かつスキーマの合成により文を複雑化していた。

L2 幼児は、まずは「疑問語も」「疑問語ない」を全部否定標識として獲得し、その後{疑問語ない+ }スキーマを生成し、発話意図に近づけるために、スロット内に言語ユニットを当てはめていた。スロット内の発達や統語・形態上の修正は漸進的になされた。第二段階の{何もない+ }{誰もない+ }等のスキーマは、人間の処理容量の原理からひと固まりで処理されるものであり、記憶と想起のしやすさを無意識に目指した合理的かつ簡素化された文法といえる。

こういった産出から母語転移の可能性を指摘した。L2 幼児は母語のユニットに対応す

る日本語の表現を one to one で切り取ったことが考えられ、「誰もない」を Nobody と対応させユニット抽出の手掛かりとしていたことが推測される。Andersen(1984)は One to One Principle で意味と形式をマッピングさせると指摘しているが、本研究では one to one で母語と目標言語の形式をリンクさせている可能性を指摘した。

L2 幼児の約1年に及ぶデータを分析し、理由を表す接続詞「だって」と接続助詞「から」の習得プロセスを追究し、論文化した。

L2 幼児の理由を表す接続詞の習得プロセスを明らかにし、次に示すような発達段階を明らかにした。この結果は、CSS 仮説(橋本2008)の妥当性を示すものであった。

第一段階) 「だってが」のインテイクと使用
単一標識を広範囲に使用する。

スロット内と構造の双方で習得を進める。
第二段階) 「だってが」「だって」「から」といった類似機能をもつ新しい標識のインテイクと検証 - 複数の標識が競合し、中間言語システムを再構築する。

第三段階) 「だってが」の削除、「だって」と「から」のみの精緻化された表現 - 規範標識を獲得する。

さらに、母語転移の可能性も指摘した。「だってが」は母語の *parce que* を One to One principle の原理でマッピングさせて、広範囲に使用していたといえる。「だって」スキーマは、「だってが」スキーマの不適切な部分が削ぎ落とされて出来上がったものであり、「だってが」スキーマは「だって」スキーマの異形であったといえる。

さらに、段階的習得プロセスを微視的に調査した結果、スロットの中身においても発達を確認することができた。最初は言語化されない状態に始まり、ゲシュタルト的表出である名詞1語などから動詞(仮原形)へ、そして複雑な構造へと変化を遂げた。産出パターンも、理由のみを表出するパターンから、事態と理由の両方を言語化し因果関係を明確に示すパターン、つまり単文を超えた高度な言語処理能力が要求されるレベルへと発達していった。

「から」を使用した構造の獲得は、{だってが+ }構造からの発達と相互作用することでなされ、「だって(が)」無しの洗練された表現へと発達していった。

母語を出発点とし目標言語の体系へと漸進的に修正されていく中間言語の変遷として捉えることができた。それぞれの次元で習得の駒が進められ、さらに相互に作用することで進展する重層的かつ統合的習得のプロセスを明らかにした。

その他の L2 幼児を対象とした動詞形に関する追究も行い論文化した。今後公表する予

定である。

用法基盤モデルの習得プロセスを日本語の L2 習得に応用させ、ピボット・スキーマからアイテム・ベースへと進むプロセスについて考察を行い、論文化した。

論文の中では、具体的な動詞(形容動詞)に対応する助詞を一纏まりで学習する、つまり { +助詞+具体的な動詞(形容動詞) } といったアイテム・ベースのスキーマを生成することが、規範的構造を獲得する手掛かりとなっていることを指摘した。加えて、次のような段階性を示した。

第一段階) 述語(動詞、形容動詞等)をピボットにしたスキーマを生成する。

第二段階) 述語(動詞、形容動詞等)ごとにアイテム・ベースの学習を行う。助詞・述語が一纏まりとなった「結合スキーマ」(橋本 2008){ +助詞+具体的な動詞(形容動詞) } を生成する。

第三段階) グローバルなルールを生成し適用する。

先行研究(橋本 2008、2009)で示されていた、第一段階)句レベルの固まり学習、第二段階)助詞の抽出、第三段階)助詞の過剰般用、といった段階から、第四段階)規範的助詞の使用に至るには、述語(動詞、形容動詞等)ごとのアイテム・ベースの学習が役立つことが明らかとなった。岩立(1992)の指摘するローカル・ルールの段階に相当することを述べた。規範的構文は、1 つには、述語と助詞の結び付きに注目の次元をシフトさせることで獲得されると結論づけた。

L2 幼児 1 名のデータ収集を縦断的に行った。分析は今後行う予定である。

(2)課題 1 と 2 について

L2 幼児の研究をレビューし、L1 幼児と比較を行い、論文化した。L2 幼児の研究は、助詞の習得に関する研究が比較的多いため、それら先行知見をまとめた。助詞の習得プロセスが「スロット付きスキーマ」の生成と合成により進んでいくことを指摘し、CSS 仮説の妥当性を示した。L1 幼児とは異なる L2 幼児の特徴について次のように指摘した。

・L1 幼児は、保守的かつ漸進的に習得を進める。

・L2 幼児は、L1 幼児よりも認知能力が発達していることからスキーマ生成を早期に行うことができる。それを暫定ルールとして産出に生かしている。

・上記特徴は、L2 幼児が、L1 幼児ほどインプットを十分に得られないこと、さらに、コミュニティにおける意図表出の必要性に迫られることから生じるものである。

L2 幼児の習得プロセスと L1 幼児との違い

について明らかになった研究成果を講演内容に盛り込み、発表した。(〔その他〕に記載)

新たに、L1 幼児 1 名の観察とデータ収集を行っている。分析の際に必要なであれば補完的に使用する予定である。

(3)課題 3 について

L2 成人(教室学習者)のコーパスを使用することで、L2 成人 1 名の可能形式の習得プロセス追究し、その結果を発表した。

発表後、対象者を L2 学習者 3 名に増やし、3 名のコーパスデータを分析し、可能形式の習得の段階性を明らかにした。L1 幼児や L2 幼児とは異なる段階性を指摘し、L2 成人のトップダウンの習得の側面を指摘した。

(4)課題 2 と 3 について

L1 幼児 1 名、L2 幼児 3 名、L2 成人(学習者) 3 名分のデータを分析し、L1 幼児・L2 幼児・L2 成人の可能形式の習得プロセスについてまとめ、比較することで共通性と差異を明確にし、論文化した。

それぞれの習得の段階性を明らかにすることで、CSS 仮説の妥当性を示した。L1 幼児、L2 成人、L2 幼児の習得の段階性は次の通りである。

L1 幼児の可能形式の習得の段階性は次の通りである。

第一段階) 単純形、できる

第二段階) 固まりの動詞形(可能動詞)

第三段階) { + reru } スキーマ

第四段階) { + rareru } スキーマ

第五段階) ことができる(推測)

L2 成人の可能形式の習得の段階性は次の通りである。

第一段階) 「できる」、単純形、「+ことができる」スキーマ、固まりの動詞形(可能動詞、ら抜き動詞)

第二段階) { + rareru } スキーマ

第三段階) { + reru } スキーマ

L2 幼児の可能形式の習得の段階性は次の通りである。

第一段階) 単純形、できる

第二段階) { + できる } スキーマ

固まりの動詞形(可能動詞)

第三段階) { + reru } スキーマ

第四段階) { + rareru } スキーマ(推測)

ことができる(推測)

習得の方向性の類似性と差異を示すとともに、スキーマ生成の仕方の違いについて指摘した。

(5)課題 4 について

研究成果をもとに、L2 幼児(子ども)にとって、どのような教育方法がよいか、どのよ

うな環境が必要なのかについて、講演やワークショップにおいて提言した。(〔その他〕に記載)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

橋本ゆかり(2015 予定)「用法基盤モデルから見た幼児の第二言語としての理由表現の習得プロセス - インプットと母語に基づくスキーマの生成と相互作用 - 」『認知言語学研究』創刊号 査読有

橋本ゆかり (2014)「日本語を第二言語とする幼児の疑問語使用の否定表現の習得プロセス - 用法基盤モデルのピボット・スキーマを援用して」『日本認知言語学会論文集』14: 421-431 口頭発表前査読有

橋本ゆかり(2012)「第二言語としての日本語習得 用法基盤モデルの観点からピボット・スキーマからアイテム・ベースへ」『日本認知言語学会論文集』12: 576-581 口頭発表前査読有

〔学会発表〕(計9件)

橋本ゆかり(2014)「言語習得理論を研究の視点としたコーパス分析 第一、第二言語習得の幼児・成人の三者間の比較」第8回日本語実用言語学国際会議 2014年3月23日 国立国語研究所 招待発表

橋本ゆかり(2013)「日本語を第二言語とする幼児の疑問語使用の否定表現の習得プロセス - 用法基盤モデルのピボット・スキーマを援用して」第14回日本認知言語学会大会 2013年9月22日 京都外国語大学 口頭発表

橋本ゆかり 他(2013)「多文化教員養成プログラムの立案を目指して - 教員養成系大学における大規模アンケート調査と教育実践から考える - 」日本語教育学会春季大会 2013年5月26日 立教大学 ポスター(共同)発表

〔図書〕(計2件)

橋本ゆかり 他、ココ出版、「用法基盤モデルからみた幼児の第二言語習得」『どこに向かうのか?日本語の習得研究』、2015 予定 22頁予定

橋本ゆかり 他、アルク出版、『日本語多義語学習辞典』、2012、91頁

〔その他〕

講演・ワークショップ等の活動(計11件)

橋本ゆかり(2014)「年少者日本語教育における理論的实践 - 用法基盤モデルの視点から - 」国際交流基金助成事業第2回キルギス共和国年少者日本語教育セミナー 2014年8月23日 キルギス共和国人材開発センター キルギス共和国ビシ

ユケク

橋本ゆかり(2014)「理論から考える年少者日本語教育の実践 - 認知言語学の観点から」国際交流基金)モスクワ暫定事務所)助成事業日本語教材開発セミナー 2014年8月30日 モスクワ日本文化センター ロシア モスクワ

橋本ゆかり(2012)「ことばは認知能力を使ってどのように獲得されるのか?」国語日本語教育学会 2012年12月1日 横浜国立大学

ホームページ

研究者総覧 横浜国立大学 橋本ゆかり
http://er-web.jmk.ynu.ac.jp/html/HASHIMOTO_Yukari/ja.html

6. 研究組織

研究代表者

橋本 ゆかり (HASHIMOTO, Yukari)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号: 40508058